

P10-154

バランス・スコアカードによる病院組織の活性化

長浜赤十字病院 看護部

○奥野 佐千子、大橋 直美、呉竹 礼子、
村中 千栄子、高野 洋子、中島 すま子

【目的】看護部では、平成19年度からバランス・スコアカード（以下BSCとする）を導入し、組織の活性化に取り組んできた。その経緯と、BSC導入による成果を報告する。

【方法】BSC導入1年目は相互学習、2年目は外部講師のサポートを受け、3年目には4回の研修会を開催した。1回目の研修は看護管理者全員参加でBSC作成ワークショップを行った。2回目は、年度初めに各部署のBSCに基づくビジョン発表会と部署のフォローアップ、3回目は中間発表会、4回目は年度末の成果発表会を行い、BSC展開の一連を実践し評価した。

【結果・考察】平成21年度は、「急性期病院としての機能の強化」「やさしさをかたちにできる看護の提供」「働き続けられる職場づくり」の3つを戦略テーマとして、看護部門が丸となり目標達成に取り組んだ。「急性期病院としての機能の強化」では、地域・院内連携システムの構築、クリニカルパスの作成・活用件数の増加などの効果が得られ、地域医療支援病院として承認を得た。「やさしさをかたちにできる看護の提供」では、専門性の高いケアの実現を目指した人材育成に取り組み、皮膚・排泄ケア、認知症看護の院内認定ナースコースを発足させた。「働き続けられる職場作り」では、多様な勤務形態の実現に向け、変則二交代制勤務導入部署の拡大や、正職員育児短時間勤務制度の導入に取り組んだ。また、長期休業者の復帰支援や研修時の保育室を開設し、ワーク・ライフ・バランスの実現を推進した。結果、看護師の離職率は7%と前年度を下回り、看護師の確保率も100%を超え、看護師の定着を促進した。また、BSCを導入したことで、各部署の小集団活動の活性化、他部署や他部門との連携強化や波及効果、看護管理者の能力開発にも効果をあげ、病院組織を活性化している。

P10-156

諏訪赤十字病院における院内緊急対応の現状

諏訪赤十字病院 看護部

○矢部 しげみ

当院では、平成10年より院内緊急コールを設置し、院内急変に備えている。そのほかに、AEDの設置、救急カートの院内統一に向けての整備、院内1次救命処置習得コースの開催など、院内急変に対して体制を整えてきた。院内緊急コールに関しては、6時から21時までの運用であったものを、昼夜問わず運用するように変更し現在に至っている。院内の急変対応時には、医療安全委員会で証が行われる事例もあるが、すべてに対してではない。急変時対応の振り返りとして、人員は適切であったか、的確に1次救命処置が行われたかなど、詳細なフィードバックがなされていないのが現状である。今回は、当院の院内緊急対応について現状を振り返り、急変時の対応の充実にむけて検討したので報告する。

P10-155

7対1の安定的な継続取得にむけた外来・病棟一元化

長野赤十字病院 看護部

○佐藤 澄子

当院は、2007年に7対1入院基本料(以下7対1)を取得したが、その継続の危機が過去5回あった。そこで、今後安定した7対1継続取得に向け、外来・病棟を一元化し、人材の有効活用と継続看護に取り組んだ。

【当院の概要】急性期病院 病床数700床 7対1対象病床数545床 一般入院患者数607.1人(新入院数36.7人)/日 平均在院日数15.1日 病床利用率92.3% 看護職員総数715人 7対1対象病棟看護師定数359人 外来看護師60人

【現状分析】4月の新規採用者は60人前後であるが、人件費率54.9%と高く今以上の採用は不可能。7対1の月平均患者数506人として計算すると看護師は不足している。そこで外来看護師は同じ診療科の病棟と一元化し、協力しあう体制をとる。

【結果】外来・病棟一元化プロジェクトチームを発足し定例会議、アクションプラン・運用規定の作成をした。また病院幹部にプレゼンテーションし、協力要請と病院運営会議・管理会議で説明し承諾を得た。外来と病棟の支援体制は、従来の外来看護師60人を2つに分轄し、1つは各科外来責任者となる外来専任看護師(36人)として外来所属、もう1つは病棟業務を行う外来支援看護師(24人)として病棟所属にした。11月より一元化の導入となり、外来支援看護師が病棟業務を行ったトータル時間は11月325時間(41人役)、12月380時間(48人役)であり、月2人は看護師確保に繋がった。病棟業務につけるのは、診療科によってバラつきはあったが、外来支援看護師より「金曜は、病棟の回診につき外来の情報伝えてくれる。また患者の状態把握もできる」。患者より「外来と病棟に同じ看護師が来てくれるので安心」という評価を受けた。病院全体では1日看護師2人以上の余裕を保ちつつ現在も7対1を継続している。

P10-157

チーム医療向上のために ～プロジェクトの取り組み～

庄原赤十字病院 看護部

○澤井 千鶴、平川 加奈子

【目的】A病棟ではH21年度、患者に安全・安楽な医療・看護を提供するため、知識・技術の向上、情報の共有化、患者・家族の全体像の把握を十分に行うことを目的にあげ、医師・看護師合同の5つのプロジェクトチームを結成した。その中の肝臓チームに焦点を当て活動を振り返ることで、今後のプロジェクトの活動に活かし、チーム医療向上につなげる。

【取り組み】1、定期的なカンファレンス肝臓疾患で入院中の患者・家族の情報交換、今後の治療・看護方針を考えるカンファレンスの内容を記録に残し、病棟スタッフが把握できるようにする2、疾患・治療・検査についての勉強会担当を決め学習したものを肝臓チーム内で共有3、一年間の振り返り、今後の課題の明確化活動による意識の変化、病棟への働きかけの具体化

【結果】プロジェクトの活動を行っていく中で全体像が今まで以上に明確化され、予測した個別性のある看護が明らかになりモチベーションアップにつながった。また肝臓チーム内での学習や情報交換を行っていく事で、患者・家族の全体像がさらに明確になり積極的に関れるようになった。

【考察】知識・技術を習得・理解することで仕事に対する充実感が生じた。情報を共有し、全体像をつかみ患者・家族・医師・看護師がひとつの目標に向かって進むことが出来るようになることが安全・安楽な医療・看護の提供につながると考える。個々が向上心を持ち、自らが発信源となり勉強した内容を病棟内に情報提供していくことが刺激をし合える環境を作り、病棟全体のレベルアップにつながると考える。各チームが昨年以上の活動を行い安全・安楽な医療・看護を提供していく必要がある。